



たての としこ 館野 敏子 さん（関本 上）

取材中も聞こえてくる鳥のさえずりに癒やされました。国蝶のオオムラサキの姿も見られるそうです。

## 子どもたちの実体験を育む場として始まった五郎助山

同会は平成12年に発足し、現在80人の会員で構成されています。設立のきっかけについて中川さんは「当時、テレビゲームが流行し、外で遊

びたいけんを おすすわけ するまち 筑西市

# 子どもたちの豊かな心を育む 自然いっぱい五郎助山



五郎助山（上野 1073）

関城地区の上野にある五郎助山をみなさんはご存知ですか。年間約2000人が訪れ、イベント時には魚釣りやツリークライミングなど、自然を体いっぱい楽しむことができ

ぶ子どもたちがめつきり減っていました。子どもたちには外に出て、自然の中でさまざまな体験をしてほしいと思い、里山を使った青少年の健全育成に賛同してくれる有志を集い、会を設立しました」と教えてくれました。

## ゼロから行った里山整備

かつての五郎助山はゴミ捨て場で、人が入れない状態だったそうです。「まずはゴミの撤去作業から始め、次に木の間伐や井戸掘りを行いました。トイレや水道もなかったので、会員の技術を持ち寄り手探りで整備しました」と中川さんは当時を振り返ります。作業を続けること



竹澤理事長（左）と中川前理事長（右）

約一年。満を持して子どもたちを招待するも、そこには山遊びの経験がなく戸惑う子どもたちの姿があったそうです。会員自ら子どもたちに一から遊び方を教えたり、会員の発案で植物観察会やキャンプなどを企画したり、現在までさまざまなイベントを開催しています。「整備時に学んだ動植物の知識が、イベントの発案に役立っています」と中川さんは笑顔で話してくれました。

## 自然の中で見える 子どもたちの違う一面

二人は今、里山の活用がさらに進むことを期待しており、学校や子育て支援団体、子ども会の行事で積極的に活用してほしいといいます。「自然の中では心がほぐれるのか、普段おとなしい子どもでも五郎助山ではいきいきとした姿を見せてくれると学校の先生が話してくれました。不登校や発達障がいの子の支援の場としても活用いただき、子どもたちの成長につなげてほしいです」と竹澤さん。中川さんも「今は学力のみが重視されがちですが、外に出て生き物や他学年の子と触れ合うということは、人間性や社会性、ひいては生きる力が



身に付くと思います」と五郎助山の力に期待しています。

最後に、二人にやりがいを感じてみると「自然の中で遊ぶ子どもたちのキラキラした表情がたまらないんだよね」と、はじけた笑顔で教えてくれたことが印象的でした。

## 取材を終えて

青少年育成や環境保全、さらには観光など、多方面に活用できる五郎助山は多くの人の想いが詰まった宝であり、今後も残すべき財産だと強く思いました。

五郎助山はいつでも出入り自由。みなさんもぜひ里山の自然の中を散策し、年間をとおして開催される魅力的なイベントに参加してみたいかがでしょうか。